

# 難病、貧困等で苦難のアジアに光を 中村哲 手を心を差し伸ばす



木々が立つ用水路末端地区を背に、現地の植樹担当メンバーと談笑する中村さん（ペシャワール会 PMS 提供）

同じアジアのアフガニスタンやパキスタン。その民が陥った苦難の克服を助成する日本人医師がいた。北九州出身の中村哲。その生き方、言動、そこから生まれた諸々は多くの人を勇気づけ、励まし、感銘を与えた。その影響は彼の没後の今、さらに大きく響き、続いている。

## 現地活動35年 アフガニスタンの民とともに

今世紀直前の2000年（平成12年）夏、アフガニスタンで同国民の約1200万人が飢餓や餓死寸前に追い込まれる大旱魃が発生、大量の流民が首都カブールや隣国パキスタンのペシャワール等に逃れる事態になった。アフガニスタンのドラエ・ヌール診療所立て直しのため現地に行った中村は、そこで多くの子供が赤痢などで死んでゆくのに接し、飲料水の欠乏がその原因になっているこ

とを知った。そのため彼は「病気はあとで治せる。とにかく今は生きること」と言って用水確保の水計画を提唱した。合わせて、砂漠化している大地に緑を蘇らせる「緑の大地計画」を立て2003年3月、実行に着手した。  
大河川からの取水堰、用水路建設、井戸堀、試験農場の建設、植樹などを現地住民とともに取り組み、2010年（平成22年）までに総延長約27キロに及ぶマルワリード用水路、約1600本の井戸、さらに地下水路（カレーズ）約40か所を修復。柳を中心に約100万本を植樹した。こうした努力で現地は砂漠から農地に転換。村人約15万人が戻り、100万人以上の生活を支える大地となった。  
その中村哲医師が2019年（令和1年）12月4日、アフガニスタン・ジャラバードで武装集団の銃撃に遭い73歳で死去した。その業績は何物にも代え

がたく、アフガニスタン政府も同年、名誉市民権を贈って感謝していたばかりだったのにー。

中村医師は、北九州市若松の作家火野葦平のおい。生まれは福岡市だが幼



北九州市若松で親族との写真に収まる少年期中村哲さん（2列目右から2人目）。その後ろに立つのが火野葦平（火野葦平資料の会提供）

少時、父母の里の若松で育ち小学校にも入学、その後、親の都合で福岡市、古賀町に転居し九州大医学部へ。卒後の1978年（昭和53年）、福岡の山岳会の同行医師としてパキスタンを訪れ、山地でハンセン病、失明に苦しむ多くの村民に出会い「医療に恵まれないパキスタンで一粒の麦になりたい」との思いを抱いた。

その意思を知った有志らが1983年（昭和58年）に福岡市でペシャワール会を組織、中村医師を現地代表として翌年、パキスタン・ペシャワールのミッション病院ハンセン病棟に送り出した。以後、同会はPMS（平和医療団・日本）としてパキスタン、隣接のアフガニスタン両国の無医地区での医療活動を展開。中村医師は18年間、その活動をリード

し、その後、現地住民を病に陥れるのは水のない荒れた大地だと訴え、緑の大地復旧に力を注いできた。

## 平和で飢餓のない国への悲願 民とともにペシャワール会も 継ぐべし

同会は2023年6月3日、福岡市で現地報告会を開催、村上優会長は現地情勢について「1979年のソ連侵攻に始まった現地での戦争は2021年に終わり、中村先生たちが作り上げた農地1万6500畝は現在2万3800畝まで増え、人口も増加し平和が蘇った。我々は先生が作った平和を引き継いでいかねばならない」と話し、中村医師と一緒に行動していた同会PMS支援室長の藤田千代子さん（64）も「我々

は今後もアフガニスタンの人々の自給自足を支援した先生のその遺志を継いでいく」と決意を述べた。

北九州市には中村医師と全く同じ理念、同様の行動で人、社会を助成する人たちもいる。アフリカ・スーダンで医療活動している認定NPO法人ロシナンテス代表の川原尚行さん（57）。中村医師とは九州大医学部後輩でもある。中村医師の悲劇当時、「中村先生は私の生きる標（しるべ）でした。先生の訃報に接した時、私自身の身体の一部が傷つき、魂を失うような感じを覚えまして」と嘆き、今また、現地スーダンで内戦が発生し活動中断に遭わされている。平和、活動再開を願ってやまない。

シニアスタッフ 村田和夫